

高次脳機能障害支援普及事業が円滑且つ適正に運営されるために事業調整委員会が設置されている。委員については、拠点病院医師、三重大学医学部医師、医療相談担当者、行政・労働機関関係者、当事者団体代表などから構成されている。

<平成20年度 相談支援体制連携調整委員会 委員>

所 属・職 名	氏 名
松阪中央総合病院 リハビリテーション科部長	太田 喜久夫(委員長)
藤田保健衛生大学 七栗サナトリウム 病院長	園田 茂(副委員長)
三重大学医学部 神経内科 准教授	成田 有吾
三重大学医学部 脳神経外科 准教授	松島 聡
鈴鹿厚生病院 副院長	川喜田 昌彦
脳外傷友の会三重TBIネットワーク(当事者団体)代表	古謝 由美
三重県医療ソーシャルワーカー協会 会長	畑中 寿美
三重障害者職業センター 所長	浅利 幸司
三重県身体障害者更生相談所 所長	野末 孝行
三重県身体障害者総合福祉センター 所長	山本 仁
三重県身体障害者総合福祉センター 診療チームマネージャー	神田 仁
三重県健康福祉部 障害福祉室 室長	脇田 愉司
(事務局) 三重県健康福祉部 障害福祉室 副室長	板崎 寿一
(事務局) 三重県身体障害者総合福祉センター 支援チーム 相談支援グループ	鈴木 真
(事務局) 三重県身体障害者総合福祉センター 支援チーム 相談支援グループ	田辺 佐知子
(事務局) 三重県身体障害者総合福祉センター 支援チーム 生活グループ	田森 昌代

<平成20年度 相談支援体制連携調整委員会 開催実績・予定>

開催日(開催予定日)	場所	委員出席者数
平成20年6月19日	三重県身体障害者総合福祉センター	11名
平成20年12月18日	三重県身体障害者総合福祉センター	13名
平成21年3月19日	三重県身体障害者総合福祉センター	一名

内容は、高次脳機能障害支援普及事業における事業のあり方について、障害者自立支援法の情報提供、相談・支援状況報告、研修会開催報告などである。

3. 啓発・普及活動

ア. 高次脳機能障害者地域支援セミナー

本セミナーは、「高次脳機能障害」を多角的に研修するために、見識者による基調講演を主たる内容とした研修会である。対象は、医師・PT・OT・ST・MSWなどの医療関係者、市町福祉などの行政関係者、福祉施設職員及び当事者・家族である。

<平成20年度 高次脳機能障害者地域支援セミナー 開催状況>

「第15回高次脳機能障害者地域支援セミナー」(一般対象)

平成20年9月6日(日) 14時～15時50分

三重県総合文化センター 大研修室

講師：東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学講座 助教 橋本 圭司

参加者 161名

「第16回高次脳機能障害者地域支援セミナー」(専門職対象)

平成20年11月5日(水) 10時～16時30分

三重県身体障害者総合福祉センター 大研修室

講師：松阪中央総合病院リハビリテーション科 部長 太田 喜久夫

脳外傷友の会 三重TBIネットワーク代表 古謝 由美

三重県身体障害者総合福祉センター 相談支援グループ 相談支援専門員 鈴木 真

三重県身体障害者総合福祉センター 看護・療法グループ 臨床心理士 長谷川 純子

参加 74名

イ. 学会発表

① 太田 喜久夫：平成20年6月5日「日本リハビリテーション医学会学術集会」

「外傷性脳損傷による高次脳機能障害者におけるC I Q変化」

② 鈴木 真：平成20年12月5日「第16回職業リハビリテーション研究発表会」

「障害者自立支援法における高次脳機能障害者への就労支援」 参加者100名

ウ. 高次脳機能障害者(児)リハビリテーション講習会の開催

日本損害保険協会助成事業により、三重県高次脳機能障害支援普及事業相談支援体制連携調整委員会に委託された研修事業を、三重県では、当事者・家族を対象としたリハビリテーション講習会として県内各地で実施し、最新情報の提供や相談会を開いた。

<平成20年度 高次脳機能障害者(児)リハビリテーション講習会 開催実績>

日時	地域	開催場所	参加者数
平成20年10月25日	南勢地区(尾鷲市)	尾鷲市福祉保健センター	55名
平成21年1月31日	北勢地区(四日市市)	四日市市総合会館	88名

エ. 講演会・学習会での講演および発表実績

① 太田 喜久夫：平成20年9月27日「長野県高次脳機能障害リハビリテーション講習会」

「高次脳機能障害の生活支援と社会参加に向けた地域連携の構築」 参加者90名

② 鈴木 真：平成20年11月11日「三重県サービス管理責任者研修」

「高次脳機能障害支援普及事業」 参加者196名

③ 鈴木 真：平成20年11月14日「滋賀県高次脳機能障害研修会」

「高次脳機能障害者支援ネットワーク」 参加者108名

④ 鈴木 真：平成21年1月24日「平成20年度職業リハビリテーション実践セミナー」

「就業支援における連携1～雇用に向けた各関係機関とのチームアプローチ～」 参加者58名

オ. 視察・研修対応

全国から、高次脳機能障害支援普及事業や地域支援ネットワークの構築などについての視察を受け入れ、対応した。(7月31日 広島県立障害者リハビリテーションセンター、8月1日 栃木県、9月11日 和歌山県子ども・障害者相談センター)

カ. その他

・第4回東海ブロック連絡協議会の開催

平成20年6月13日 木沢記念病院 中部療護センター3階 討議室

・第5回東海ブロック連絡協議会の開催

平成21年1月23日 アクトシティ浜松 コンgressセンター44会議室

4. 平成20年度相談支援状況(平成20年4月1日～平成21年3月10日)

相談件数および相談実数 相談件数 769件（電話問い合わせを除く）
新規相談者実数 76名

- (1) 新規相談者 (N=76) 年齢構成 平均年齢 42.1歳 男性 61名、女性 15名
(2) 新規相談者における原因疾患の内訳
外傷性脳損傷 36名（脳挫傷 33名、DAI 5名、外傷性SAH 6名※重複あり）
脳血管障害 35名、脳腫瘍 3名、低酸素脳症 1名、脳炎 1名、その他（不明も含む） 1名
(3) 居住地 三重県内の 市町のうち、11市 / 14市、4町 / 15町から相談依頼あり。
県外 2 県相談依頼あり。

5. 身障センター訓練終了後の帰結先（平成13年4月～平成21年3月10日）

訓練終了全ケース数 152

性別 男性 127名 女性 25名

平均年齢 42.9歳

身障手帳 有 108名 無 44名

訓練期間 平均日数 391.4日（支援事業前からの利用者も含む）

訓練終了時の一般就労・復学者 54名（36.0%）

訓練終了時の状況（平成21年3月10日時点）

★雇用就労・就学 54名 36.0%
新規就労 19名
復職 30名
新規就学 3名
復学 2名

★福祉就労 38名 25.0%
身障授産 23名
精神障害授産 6名
小規模作業所 9名

★福祉サービス 22名 14.0%
身障デイサービス 12名
療護施設 10名

★在宅生活・その他（就労待機・死去・再訓練を含む）
38名 25.0%

6. 問合せ先

〒514-0113 三重県津市一身田大古曾 670-2

三重県身体障害者総合福祉センター 担当 鈴木・田辺・田森まで

TEL 059-231-0037（生活援助棟直通）

FAX 059-231-0694

Eメール suzuki0-s@mie-reha.jp

□■まとめ□■

3年間の研修実施状況 (H18.4~H21.3.10)

	主催研修会件数	参加者数
18年度	11回高次脳地域支援セミナー	111
	12回高次脳地域支援セミナー	117
	リハビリテーション講習会①	47
	リハビリテーション講習会②	57
19年度	13回高次脳地域支援セミナー	127
	14回高次脳地域支援セミナー	116
	リハビリテーション講習会①	40
	リハビリテーション講習会②	81
	リハビリテーション講習会③	83
	高次脳講演&シンポジウム	106
20年度	15回高次脳地域支援セミナー	161
	16回高次脳地域支援セミナー	74
	リハビリテーション講習会①	55
	リハビリテーション講習会②	88

3年間の相談件数 (H18.4~H21.3.10)

	新規相談 (直接)	新規相談 (間接)	継続的相談	相談件数 (延べ)
18年度	11	61	32	274
19年度	12	83	77	576
20年度	13	63	111	769

※主催研修会件数 (県事業=高次脳機能障害者地域支援セミナー)

(厚生労働科学研究事業=高次脳機能障害講演&シンポジウム)

(日本損害保険協会助成事業=高次脳機能障害者(児)リハビリテーション講習会)

※相談件数 (コーディネーターが直接面接した相談数であり、電話相談・匿名は含まない)

新規相談 (直接) = 家族・本人から相談があり面接対応した実数

新規相談 (間接) = 医療・行政・福祉など上記以外から相談があり面接対応した実数

継続的相談 = 新規相談以外で前年度から引き続き相談にのっている実数

相談件数 (延べ) = 直接面接した延べ件数

〔三重県 高次脳機能障害支援普及事業〕

急・亜急性期、
回復期病院、
一般病院 等

当事者・家族等
(入院・施設入所・在宅)

市町村福祉
社会福祉施設等

<医療機関連携>
三重大学関連病院
一般病院
回復期病院 等

相談・訓練・支援ニーズ

連携

連携

◆三重県身体障害者総合福祉センター (高次脳機能障害支援拠点機関)

- ◆支援センター的位置づけ
- ◆支援コーディネーター設置(2名) ※内1名は兼務
- ◆高次脳機能障害相談支援体制連携調整委員会の設置

【役割】

- ◆相談体制 (365日)
- ◆診断・評価
- ◆訓練・評価
- ◆生活・社会支援調整
- ◆情報提供・啓発
- ◆関係機関との連携
(ネットワーク化)
- ◆社会資源の開発
- ◆高次脳機能障害者の権利擁護

【機能】 包括的リハビリテーションシステム

- ◆松阪中央総合病院
高次脳機能障害診断・訓練、外来通院
アフターフォロー
- ◆七栗サナトリウム
高次脳機能障害診断・認知リハ訓練

<地域医療連携モデル>

松阪中央総合病院(急性期)

鈴鹿厚生総合病院(急性期)

鈴鹿厚生病院(精神科)

長野厚生病院(回復期)

七栗サナトリウム(回復期)

松阪中央総合病院(急性期)

支援コーディネーター訪問
1～2日/月(随時)

市町村福祉
社会福祉施設
・ 身障系施設
・ 精神系施設
・ 知的系施設
地域相談支援セ
ンター
介護保険関連連
携センター など

障害者職業セン
ター
公共職業安定所
損害保険協会
会社
権利擁護セン
ター
など
教育機関
(学校 など)

当事者団体 など

高次脳機能障害者に対する地域支援ネットワークの構築に関する研究

分担研究者 種村 純 川崎医療福祉大学 医療技術学部 教授

研究要旨 岡山県では川崎医科大学附属病院および岡山県立福祉の郷の両拠点機関において、高次脳外来、電話相談、医療から福祉・就労支援へのサービスフローなどサービスの充実を引き続き進めた。対象者や問題点の変化が認められた。また、圏域ごとの支援体制に移行するために山間地域をモデル地区としてグループワークを開始した。

A. 研究目的

本研究は岡山県における高次脳機能障害支援拠点機関である川崎医科大学附属病院と社会福祉法人旭川荘おかやま福祉の郷を中心とした、高次脳機能障害者支援のための地域支援ネットワークの展開について実践を報告し、そのノウハウを提供するとともに、ネットワーク形成に関する課題を明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

地域支援ネットワーク、診断・リハビリテーションおよび社会的支援体制の発展を目的として以下の活動を行った。

1. 川崎医科大学附属病院と岡山県立福祉の郷の両施設における相談支援の実態と本年の特徴を検討した。

2. 普及啓発を目的として、医療・就労・福祉関係支援者、地域保健担当者、一般と異なった対象者に向けての研修会を開催した。

（倫理面への配慮）

調査研究は所属する施設の倫理委員会の承認を経て実施する。調査対象者及び保護者・関係者から、口頭ならびに文書にてインフォームドコンセントを徹底し、調査対象者または保護者・関係者が納得し自発的な協力を得てから実施した。調査対象者の個人情報等に係るプライバシーの保護ならびに如何なる不利益も受けないように十分に配慮した。

C. 研究結果

1. 地域支援ネットワークによる成果

高次脳機能障害相談支援体制連携調整委員

会を2回、拠点支援機関実行委員会を8回開催した。また、支援検討会議を9回開催した。参加機関は全9施設から毎回30名前後、延べ262名で、症例の評価、適切な訓練や支援方法等について検討した。

医療と福祉に関する両拠点機関において引き続き以下のような事業を行った。川崎医科大学附属病院では、高次脳外来、当事者グループワーク、家族支援および電話相談を行った。社会福祉法人旭川荘では、福祉サービスの利用支援、就労支援および電話相談を行った。また、拠点以外では、県行政、おかやま脳外傷友の会・モモおよび地域リハビリテーション広域支援センター等の機関で相談を受け付けた。

2. 拠点機関の活動実績

1) 川崎医科大学附属病院

①電話相談

月曜日から金曜日の9時から16時の間、コーディネーターを中心に対応した。件数は13件と、昨年に比べ相談件数の増減はないが、相談者が医療機関から福祉機関、家族、行政（保健師）などに広がり、県外からの相談が増えた。

②高次脳外来

実人数51名（男性30名、女性21名）で、年齢20歳未満9名、20歳～39歳16名、40～59歳12名、60歳以上14名と広く分布した。昨年に比べ高齢者の比率が高くなった。原因疾患は脳外傷32名、脳血管障害6名、その他13名であった。受診目的は医療46名、手帳申請4名、家族支援1名であった。医療的支援では、診断、評価、リハビリテーションなど。福祉支援では、手帳・障害年金の申請、地域の利

用施設の紹介など。そのほか、就労支援機関への紹介、復帰先との情報交換、評価に基づいて復職時期や仕事内容について検討する。就学支援では学校との連携、卒業後の進路相談。在宅支援では社会資源の利用と家族・親族を含めた環境調整、日中通える場の利用、認知障害が重篤であったり、社会的行動障害を伴う症例は困難。

③当事者グループワーク

登録メンバーは16名、半年1クールとして目標設定し参加者入れ替えにて実施した。当事者間の交流を通してグループ内での役割による責任感が求められるなど、踏み込んだ対人技能向上をねらった。認知活動の連想ゲームでは問題解決能力を必要とし、チーム内の進行をリーダー役が進めるなどチーム内での脱抑制活動が減少しはじめている。

④家族支援

参加者数は延べ76名で、毎回、各々の参加者が1ヶ月で実行可能な目標を立案し、次回のグループ活動時に目標への取り組みについて報告があった。参加者は、当事者の症状の現れ方や生活環境が各々で大きく異なることを改めて認識した。

2) 社会福祉法人旭川荘

福祉施設における高次脳機能障害者に対して行った社会的支援の実際を検討した。対象者は旭川荘で社会的支援を行った高次脳機能障害者42名、男性33名、女性9名で、新規18名、再来24名であった。継続支援が必要な再来者が多かった。年齢は小児から高齢者まで分布し、30歳未満7名、30～49歳19名、50歳以上16名で、20歳代から50歳代までの働き盛りの年代が9割以上を占めた。原因疾患は脳血管障害と外傷性脳損傷がそれぞれ4割以上を占めた。支援を希望する内容は福祉サービス18名、就業相談14名、リハおよび評価5名、家族相談2名、教育2名、在宅生活1名であった。

地域活動支援センターにおける日中活動では、運動、外出、音楽、調理、茶話会、脳トレ、習字、大人の塗り絵などを行った。継続利用できる事例、就労等の新たな進路を見いだせる事例がある一方で、ドロップアウトする事例も存在した。

特徴的な事例として、隣接県の関係機関を利用する事例、腸管出血性大腸菌O157の後遺症など特異な原因による事例、社会的行動障害が増悪していく事例が見られた。

3) 岡山県北での支援の場作りへの協力

県北の真庭市で、地元関係者が高次脳機能障害者と家族が集う場作りを行った。拠点機関から職員を派遣して、グループワークなどの実施に協力。支援ノウハウの技術移転も兼ねている。

4) 普及啓発活動

県及び拠点機関の主催した研修会では、平成20年8月24日損保協会助成を活用して、「小児の脳損傷」に関する講演会を行った。参加人数は約100名であった。また、平成20年9月3日に岡山県高次脳機能障害支援研修会を真庭市で開催した。参加人数は約160名であった。さらに他県や専門職団体主催の合計11件の研修会へ協力した。

普及啓発用DVD「高次脳機能障害の理解と支援のために」を制作した(旭川荘寄付金財源事業)。岡山県下で支援に携わる関係者の声を集めて、「障害特性」「認知リハ」「神経心理学的検査」「就労支援」「社会的支援のポイント」「行政の活動」「家族会の活動」「家族支援」などの分野を取材した。3月、県下及び全国の拠点機関に配布する予定である。

D. 健康危険情報

特になし。

E. 研究発表

1. 著書

種村純：失語症候学の発展、鹿島晴雄、種村純、大東祥孝(編)、よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション、永井書店、大阪、2008.07、pp 3-11

前島伸一郎、椿原彰夫：原因疾患別の障害メカニズムとそのリハビリテーション、鹿島晴雄、種村純、大東祥孝(編)、よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション、永井書店、大阪、2008.07、pp48-56。

後藤祐之：就労支援、鹿島晴雄、種村純、大東祥孝(編)、よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション、永井書店、大阪、2008.07、pp628-633。

種村純、椿原彰夫：教材による認知リハビリテーション、永井書店、大阪、2009.3 予定。

2. 論文発表

種村純：社会的行動障害に対するリハビリテーションの体系とわが国の現状、高次脳機能研究、29巻1号、2009.03 予定。

用稲丈人, 狩長弘親, 山本陽子, 八木真美, 種村純: 脳損傷者の社会復帰状況と知能, 注意, 記憶, 遂行機能検査との関係, 高次脳機能研究, 28 巻 4 号, pp416-425, 2008.12.

種村純: 【高次脳機能障害のリハビリテーション】 遂行機能障害のリハビリテーション, Brain Medical, 20 巻 4 号, pp315-320, 2008.12.

種村純: 遂行機能の臨床, 高次脳機能研究, 28 巻 3 号 pp312-319, 2008.09.

種村純: 【生活場面からわかる高次脳機能障害 何に気づいて, どうすればいいの?】 病棟でどのようにかわるか 遂行機能障害とリハビリテーション, リハビリナース, 1 巻 3 号, pp244-250, 2008.05.

宮崎彰子, 種村純: 【生活場面からわかる高次脳機能障害 何に気づいて, どうすればいいの?】 病棟でどのようにかわるか 記憶障害とリハビリテーション, リハビリナース, 1 巻 3 号, pp236-243, 2008.05.

平岡崇, 嘉村雄飛, 椿原彰夫: 【生活場面からわかる高次脳機能障害 何に気づいて, どうすればいいの?】 退院に向けて, 知っておいてほしい知識 高次脳機能障害支援普及事業, リハビリナース, 1 巻 3 号, pp265-270, 2008.05.

椿原彰夫: 【医療技術と医療福祉学】 リハビリテーション医療における技術の進歩, 川崎医療福祉学会誌, 18 巻 Suppl.1, pp7-14, 2008.06.

種村純: 【認知症のリハビリテーション】 認知症の診断と評価 神経心理学的検査, MEDICAL REHABILITATION, 91 号, pp83-88, 2008.04.

3. 学会発表

平岡崇, 用稲丈人, 種村純, 嘉村雄飛, 椿原彰夫: 高次脳外来受診者における知能, 記憶, 遂行機能検査成績の解析, 第 45 回日本リハビリテーション医学会, 2008.06.

堀田さち子, 垣田敬治, 椿原彰夫: 通所リハビリテーション 8 年間の患者動向, 第 45 回日本リハビリテーション医学会, 2008.06.

山田裕子, 青柳陽一郎, 椿原彰夫: 右後頭葉脳梗塞後に視覚失認および地誌的障害を呈した 1 例へのリハビリテーションアプローチ, 第 45 回日本リハビリテーション医学会, 2008.06.

佐藤新介, 文野喬太, 椿原彰夫, 青柳陽一郎: 左半側空間無視に対する色彩明度差の影響(第 2 報), 第 45 回日本リハビリテーション医学会, 2008.06.

太田信子, 種村純: The Cambridge

Prospective Memory Test による展望的記憶過程の検討, 第 32 回日本神経心理学学会, 2008.09.

用稲丈人, 種村純, 井上桂子: 尺度解析とクラスター分析を用いた Raven's Progressive Matrices の構造解析, 第 32 回日本神経心理学学会, 2008.09.

伊藤絵里子, 種村純, 熊倉勇美, 平岡崇, 椿原彰夫: TBI 後にクレーン行動を呈した 1 例, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

種村純: わが国における現状—高次脳機能障害における社会認知行動障害—, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

室井利英, 小坂美鶴, 種村純, 椿原彰夫: 右半球損傷による談話の特徴, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

宮崎泰広, 種村純, 伊藤絵里子: 右半球損傷者の談話特徴について, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

太田信子, 前島伸一郎, 大沢愛子, 川原田美保, 種村純: Mild Cognitive Impairment(MCI)および認知症における聴覚言語性既往の虚再認の検討—展望的記憶との関連—, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

用稲丈人, 種村純: BADS 日本版下位検査と, 知能, 記憶検査成績による遂行機能の障害構造の検討, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

用稲丈人, 種村純: Raven's Progressive Matrices の尺度解析と神経心理学的検査との関係, 第 32 回日本高次脳機能障害学会, 2008.11.

【資料】

1 川崎医科大学附属病院

1. 電話相談：月～金曜日、9～16時、コーディネーターを中心に対応

1) 相談件数	平成19年度	21
	平成20年度	13

2) 性別	男	女	不明
平成19年度	13	3	5
平成20年度	7	4	2

3) 年齢	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代以上	不明
平成19年度	1	2	1	2	3	4	8
平成20年度	2	0	1	0	2	2	6

4) 原因疾患	外傷性脳損傷	脳梗塞	脳出血	低酸素脳症	その他
平成19年度	8	4	2	1	6
平成20年度	4	1	2	2	4

2. 高次脳外来（木曜日・午後）予約制

1) 受診者数	平成16年度	45
	平成17年度	49
	平成18年度	67
	平成19年度	65
	平成20年度	47

2) 性別	男	女
平成16年度	28	7
平成17年度	37	12
平成18年度	55	12
平成19年度	45	20
平成20年度	28	19

3) 年齢	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代以上
平成16年度	6	10	8	8	6	7
平成17年度	5	7	8	8	16	5
平成18年度	4	13	13	14	15	8
平成19年度	12	11	10	9	16	7
平成20年度	9	6	8	7	3	14

4) 原因疾患

	外傷性脳損傷	脳梗塞	脳出血	脳腫瘍	その他
平成16年度	30	0	13	0	2
平成17年度	33	3	10	1	2
平成18年度	45	1	13	2	5
平成19年度	43	6	9	2	5
平成20年度	28	5	2	1	11

5) 支援内容

①医療的支援ケース

- ・神経心理学的検査、画像診断等を用いた診断の実施
- ・当院における評価・認知リハビリテーション（個別訓練、グループ訓練、家族支援）と在宅生活を中心とする環境調整の実施
- ・患者様が在住する近隣の支援機関の紹介・連携
- ・社会生活が送れるようになった後の定期的フォローの実施

②福祉支援ケース

- ・社会資源が利用できるよう各種手帳・障害年金の申請、制度利用についての情報提供
- ・高次脳機能障害の状況、日常生活場面における問題点などを他機関職員、家族らと情報交換し社会資源等についての検討を実施
- ・地域の利用施設についての相談、情報提供
- ・家族会の紹介

③就労支援ケース

- ・就労支援機関への紹介を行い、高次脳機能障害について情報提供を行うなどの連携
- ・復職における支援。復帰先の職場、関係機関との情報交換の場を設け、環境調整を実施

④就学支援ケース

- ・学校との情報交換と対応についての連携

6) 支援を通じて必要であったこと

①就学支援

- ・学校との連携だけでなく、卒業後の進路相談も必要：総合的な相談とともに、ケースによっては学校、医療、その他機関との連携の必要性が生じる。
- ・復学に関して、学校側の理解が得られないこともあった。

②就労支援

- ・新規就労ケース：20代が多い。離職を繰り返しているため、評価によって能力を把握し、注意すべき点や方向性を示すことが必要。50代でも存在した。指針を示す事で安定した就労につながるケースもある。また就労支援機関との連携や手帳取得の検討も必要。
- ・復職ケース：30代以降増加。休職中に職場の環境調整を行うことが必要。うつ病、アルコール依存症など精神科、心療科疾患を発症しているケースも多かった。関連機関の協力、また復職時期や仕事内容について本人、家族、職場、医療機関で検討を要した。

③在宅支援

- ・可能な社会資源を利用する他、家族・親族で採め事が発生しているケースもみられた。障害についての周囲への理解が必須であり、よりよい在宅生活のために家族・親族を含めた環境調整を行う場が必要であった。

④福祉支援

- ・日中活動リズムを整える場が必要：昼夜逆転、意欲低下のために自宅では何もできないというケースが存在。日中通える場が必要→地域活動支援センターを利用、家族負担の軽減にもつながった。

7) 困難事例

- ・認知障害が重篤なケース
- ・社会的行動障害を伴うケース

4. 当事者グループワーク

1) 目的

高次脳機能障害の人が自分達の認知障害や行動障害を理解し、社会に出て行くために様々な作業やレクリエーションを通じて意欲の向上、注意、記憶、対人技能の向上、集団適応能力、精神的安定を目的としたグループ活動を実施した。特に社会生活場面での基本的な対人的コミュニケーション技術の向上、自己啓発の機会を得るなどを目標とした。また治療訓練法の開発普及を目指した。

2) 方法

- ・期間 : 半年1クール(6回)として、目標設定し、参加者入れ替えにて実施
I:平成19年4~9月、II:平成19年10月~平成20年2月
- ・活動日時 : 毎月1回、第3土曜日(11時~12時)
- ・登録者 : 16名
- ・スタッフ : OT7名、ST2名、計9名

内容	内 容		
I	1	オリエンテーション	自己紹介 アンケート
	2	宿題発表(最近のニュース)	ボール送り "
	3	"	シーツ物出しゲーム "
	4	"	牛乳パックジェンガ "
	5	"	新聞カーリング "
	6	"	・振り返り シーツ物出しゲーム "
II	1	自己紹介	グランドゴルフ アンケート
	2	宿題発表(最近の良いニュース)	" "
	3	"	連想ゲーム "
	4	"	" "
	5	"	" "
	6	"	・振り返り " "

各回で継続して行うプログラムとして、宿題発表、ルーティンワーク(毎回の訓練内容の記入)、アンケート(自己の良かった事、悪かった事、他の方のよかった事、グループ参加の取り組みの感想)を実施した。1クール終了ごとに再評価・効果判定の検討を実施した。同じ障害を持つ仲間との交流により、不安の軽減・自信の回復・動機付けの場になるよう全体の流れを決定し、楽しく、なごやかな雰囲気になるよう努めた。

3) 結果

- ・宿題発表では社会面の記事から、家族や学校のことなど、話題の展開が可能となった。
- ・ゲームでのリーダー役を設け、対人技能の習得に繋げることができた。
- ・評価としてFAM・FIMを使用し、障害の重症度、性別、年齢などを考慮し、活動内容に反映させることができた。
- ・メンバー相互の共感から得られやすい場の設定が行え、凝集性が高まったことにより、競争意識を引き起こす場面が見られ、ルールや役割分担など企画の検討・行動計画などに当事者の参加が得られる機会も組み込むことができた。

5. 家族支援グループ

1) はじめに

高次脳機能障害は、当事者ととも暮らす家族に対して症状への対処、家族内における役割構造の変化、生活時間の再編といった問題をもたらす。このような現状を踏まえ、家族が抱える精神的負傷感や緊張感を緩和し、ご自身の生活を充実させるための一助となるように、平成16年度より引き続き、家族支援グループワーク活動「家族のつどい」を企画、実施した。

2) 主な活動目的

- ①ご家族同士が情報交換し、一緒に考えたり話し合える場を提供する。
- ②当事者および障害への理解を深める。
- ③ご家族が自分自身をみつめることで、自身の健康づくりに役立てる。

3) 方法

・スタッフ：病院スタッフ7名。各職種（Dr・MSW・ST・OT・CP）で構成。

・実施概要：平成16年度は、1年間を6ヶ月ごと2期に分け、参加者入れ替えにて実施した。平成17年度以降は、参加定員数の制限を設けず、新規参加者を随時追加しながらグループを構成した。平成19年度以降は、当事者との続柄に基づき“親グループ”と“配偶者グループ”の2グループを構成して活動した。毎回スタッフが設定したプログラムに沿って参加者同士が話し合うミーティング形式で行われた。司会進行は全てスタッフが担当した。参加定員数の制限を設けず、新規参加者を随時追加しながらグループを構成した。毎回スタッフが設定したテーマに沿ってご家族同士が意見や気持ちを話し合うミーティング形式で行われた。

	実施期間	実施回数	参加者数 (延べ数)	主なプログラム
平成16年度	平成16年4月～平成16年9月	6	31	・KJ法を用いた悩み事、困り事の整理
	平成16年10月～平成17年3月	6	14	・生活の振り返りとストレス対処
平成17年度	平成17年4月～平成18年3月	12	73	・ちょっとこれやってみよう！
平成18年度	平成18年4月～平成19年3月	11	59	(個別に1ヶ月間の目標を設定)
平成19年度	平成19年4月～平成20年3月	12	111	・1ヶ月の振り返り
平成20年度	平成20年4月～平成20年12月	8	67	・当事者グループワーク見学
	計	55	355	

4) まとめ

毎回、各々の参加者が1ヶ月で実行可能な目標を立案し、次回のグループ活動時に目標への取り組みについてお互いに報告しあった。他の参加者の報告が刺激となり、症状への対処や生活改善への意欲向上が認められた。しかし一方で、参加者は当事者の症状の現れ方や生活環境が各々で大きく異なることを改めて認識し、同じ障害であっても互いに理解しあえない領域があると感じている様子が見受けられた。このような個別性の高い領域に対して、どのように家族支援を展開していくかが今後の課題である。

II 社会福祉法人 旭川荘

1) 社会的支援

- ①実人数：42人（男性33・女性9）（新規18・再来24）
- ②年齢：10歳未満：1、10代：1、20代：5、30代：11、40代：8、50代：13、60歳以上：3
- ③原因傷病：脳血管障害：19、脳外傷：14、低酸素脳症：3、その他：6
- ④主訴：福祉サービス：18、就業相談：14、リハ評価：5、家族相談：2、教育：2、在宅生活：1

2) 日中活動の内容

- ①プログラム：運動、外出、音楽、調理、茶話会、脳トレ、習字、大人の塗り絵など。
- ②実施してきて：継続利用できるケース、就労等の新たな進路を見いだせるケースがある一方で、ドロップアウトするケースが存在する。

3) 特徴的な事例

- ①隣接県の関係機関を利用する事例：隣接県の医療機関を利用した人が当県内の自宅に退院する事例では、「越境」相談により隣接県の支援コーディネーターとの協働が必要であった。
- ②腸管出血性大腸菌 O157 の後遺症事例の存在：O157 感染は消化器疾患と思われがちであるが、中枢性後遺症を遺す事例もある（千葉リハビリテーションセンターでも報告例あり）。
- ③脳外傷の社会的行動障害が増悪していく事例：夜間、大声でのひとりごとにより近所への遠慮から転居を余儀なくされた事例。
- ④ひきこもり（的）になり、通所の日中活動からドロップアウトする事例。

III 地域連携ワーキンググループ

1) 目的

モデル事業以来長年の懸案であった、県北における社会資源の開発に取り組んだ。

2) 方法

平成 20 年 6 月から真庭市の落合病院において高次脳機能障害者とその家族が 1 ヶ月に 1 回集まる場を設け、地元の医療・福祉関係者に拠点機関職員が加わってグループワークを実施している。これは拠点機関から真庭市地域のリハビリテーション関係者に高次脳機能障害へのかかわり方を技術移転する場としても機能し始めている。

一方、医療・福祉のいずれの制度にも依拠せず、支援普及事業独自の取り組みであることから地元の機関にとっては報酬が支払われず持ち出しサービスになるという課題も残されている。

- ①参加メンバー：

（落合病院）OT、MSW	（湯原温泉病院）OT
（白梅の丘）ケアマネ	（金田病院）SW、PT
（真庭市）保健師、ケアマネ	
（拠点機関）OT、ST、患者会	
- ②日時：毎月 1 回（14 時～15 時半）
- ③場所：落合病院
- ④実施内容：

平成 20 年 6 月～平成 21 年 1 月	当事者グループ訓練
平成 20 年 10 月～平成 21 年 1 月	家族支援
平成 20 年 9 月、11 月、平成 21 年 1 月	相談会

IV 平成 20 年度研修会関係

1) 県主催による高次脳機能障害支援研修の開催

平成 18 年度から取り組んでいる高次脳機能障害支援普及事業の目的である、障害の理解と支援の普及を図るため、市町村担当者、県担当者、各相談支援事業所相談支援専門者等に対する研修を行い、約 100 名の参加者があった。

- ①日時：平成 20 年 9 月 3 日（水）13:30～
- ②会場：勝山文化センター 2 階 第 1 会議室
（岡山県真庭市勝山 319、TEL：0867-44-2011）
- ③内容：
 - ・高次脳機能障害の評価及び認知リハビリテーションについて
山本陽子（川崎医科大学附属病院・ST）
 - ・高次脳機能障害者の家族支援について
竹中麻由美（川崎医療福祉大学医療福祉学科・准教授）
 - ・支援拠点機関での支援内容及び活動について
後藤祐之（おかやま福祉の郷のぞみ寮）
 - ・真庭地域での活動について
池田恵子（白梅の丘）、飯嶋信博（落合病院）

2) 瀬戸内市ケアマネ対象の高次脳機能障害に対する研修会

平成 20 年 10 月 16 日に瀬戸内市において「高次脳機能障害の理解について」約 30 人のケアマネ及び介護職員を対象に研修会を行った。

4) 岡山リハビリテーション講習会の開催

159 名の参加があった。

①日時：平成 20 年 8 月 24 日（日）10：00～14：30

②場所：川崎医療福祉大学 講義棟 2601 教室

③内容：

- ・小児の高次脳機能障害の症候学、特に発達性障害との鑑別について
宇野彰（筑波大学人間総合科学研究科・准教授）
- ・千葉県の取り組みと見えてきた課題
太田令子（千葉リハビリテーションセンター・臨床心理士）

5) 症例検討会の開催

月に一度（11 回／年）症例検討会や勉強会を開催し、適切な訓練や支援方法等について総合的な検討を行った。毎回 30 人前後、9 回まで延べ 262 人の参加者があった。

症例検討会のほか研修会も開催した。

- ・オーストラリア視察報告
清水正紀（おかやまモモの会会長）
- ・職業リハビリテーションの対象者像と職リハを利用した就職支援について
鈴木瑞哉（岡山障害者職業センター所長）

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
餅田亜希子、 中島八十一	失語症と高次脳機能障害に対する社会支援体制	鹿島晴雄、 大東祥孝、 種村純	よくわかる失語症セラピーと認知リハビリテーション	永井書店	大阪	2008	615-621
中島八十一		岩谷力他	運動器リハビリテーションクルズス	南江堂	東京	2008	20-21、 124-127、 131-133
厚生労働省・国立障害者リハビリテーション			高次脳機能障害者支援の手引き(改定第2版)			2008	
生駒一憲、加藤藤元一郎	アパシー(意欲障害)の客観的評価	小林祥泰	脳疾患によるアパシー(意欲障害)の臨床	新興医学出版社	東京	2008	101-106
生駒一憲	アパシー(意欲障害)のリハビリテーション	小林祥泰	脳疾患によるアパシー(意欲障害)の臨床	新興医学出版社	東京	2008	162-167
森悦朗、阿部修士	解離性健忘の脳内機序	柳沢信夫、 篠原幸人、 岩田誠、清 水輝夫、寺 元明	Annual Review 2009 神経	中外医学社	東京	2009	329-335
丸石正治	外傷性脳損傷	鹿嶋晴雄、 大東祥孝、 種村純	失語症セラピーと認知リハビリテーション	永井書店	東京	2008	pp520-528,
鈴木真 水谷久 森徹雄 南川久美子	高次脳機能障がいがあり、就労を希望しているが実際は難しい人への援助		障がい者ケアプラン記載事例集 たて方・かき方・すすめ方	日総研出版		2008	19-26

書籍

著者氏名	論文タイトル、書籍名、編者	ページ	出版社	出版年
森俊子、蜂須賀研二	「脳卒中後のアパシー(意欲障害)は ADL に影響を及ぼすか」 小林祥泰(編集)脳疾患によるアパシー(意欲障害)の臨床	50-58	新興医学出版社	2008
橋本学、岡崎哲也、 蜂須賀研二	「外傷性脳損傷におけるアパシー(意欲障害)」 小林祥泰(編集)脳疾患によるアパシー(意欲障害)の臨床	93-98	新興医学出版社	2008
重森 稔、塩見直人	頭部外傷後遺症、脳神経外科アドバンス、久保田紀彦監修	318-335	診断と治療社	2008
重森 稔、塩見直人	小児頭部外傷、脳神経外科アドバンス、久保田紀彦監修	336-340	診断と治療社	2008
重森 稔、宮城知也	高齢者頭部外傷、脳神経外科アドバンス、久保田紀彦監修	341-342	診断と治療社	2008

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Sekiguchi H, Takeuchi S, Kadota H, Kohno Y, Nakajima Y	Evoked brain potentials were changed by coil orientation of transcranial magnetic stimulation	Clinical Neurophysiology			2008
中島八十一	高次脳機能障害支援の現状と問題点	国リハ研紀	28	1-8	2008
Takano, K., Komatsu, T., Hata, N., Nakajima, Y., Kansaku, K	A non-training BMI system for environmental control: a comparison between white/gray and	Society for Neuroscience, 2008 Abstract	Program No. 863.9		2008
Komatsu, T., Sakihara, K., Gjinji, K., Nakajima, Y., Kansaku, K	Synchronization changes during action execution and observation: a whole-head MEG study	Society for Neuroscience, 2008	Program No. 385.1		2008
Komatsu, T., Hata, N., Nakajima, Y., Kansaku, K	A non-training EEG-based BMI system for environmental control.	Neurosci Res Suppl	6	251	
深津玲子	高次脳機能障害	Pharma Medica	26(11)	21-24	2008
深津玲子	脳炎と脳症	神経内科	68(Suppl. 5)	142-146	2008
深津玲子	特集: 高次脳機能障害の現状; 医療の側面から(1)	リハビリテーション	503(5月号)	18-22	2008
深津玲子	特集: 高次脳機能障害の現状; 医療の側面から(2)	リハビリテーション	504(6月号)	22-27	2008
深津玲子, 藤井俊勝	遂行機能障害の画像診断	Journal of Clinical Rehabilitation	17	26-31	2008
深津玲子	高次脳機能障害	Pharma Medica	26(11)	21-24	2008
深津玲子	脳炎と脳症	神経内科	68(Suppl. 5)	142-146	2008
深津玲子	特集: 高次脳機能障害の現状; 医療の側面から(1)	リハビリテーション	503(5月号)	18-22	2008
深津玲子	特集: 高次脳機能障害の現状; 医療の側面から(2)	リハビリテーション	504(6月号)	22-27	2008
深津玲子, 藤井俊勝	遂行機能障害の画像診断	Journal of Clinical Rehabilitation	17	26-31	2008

Abe N, Okuda J, Suzuki M, Sasaki H, Matsuda T, Mori E, Tsukada M, Fujii T	Neural correlates of true memory, false memory, and deception.	Cereb Cortex	18	2811-2819	2008
Ueno H, Maruishi M, Kondo K, Sawada K, Hashimoto Y, Matsumoto M	Brain activations in errorless and errorful learning in patients with DAI: A functional MRI study	Brain Injury	In press	In press	2009
Nakao, T., Miyatani, M., Nakao, M. Takezawa, T., Maruishi, M., Muranaka, H., & Doju, H.	Does the medial prefrontal cortex activity during self-knowledge reference reflect uniqueness of self-knowledge?	Japanese Psychological Research,	51	In press	2009
丸石正治, 近藤啓太, 上野弘貴	高次脳機能障害者の重症度と就労率	リハビリテーション医学	45	113-119	2008
百川晃, 丸石正治, 川原薫	高次脳機能障害者の就労支援への具体的な取り組み	臨床作業療法	5	37-41	2008
本間緑, 今泉敏, 丸石正治, 村中博幸	音声の聞き手が発話者や聞き手自身の気持ちを判断する脳機構—functional MRIによる検討—	音声言語医学	49	237-244,	2008
駒澤敦子, 鈴木伸一, 久保義郎, 丸石正治	高次脳機能障害者における社会的行動障害についての検討(1)—社会適応障害調査表作成と信頼性・妥当性の検討—	高次脳機能研究	28	20-298	2008
駒澤敦子, 鈴木伸一, 久保義郎, 丸石正治	高次脳機能障害者における社会的行動障害についての検討(2)—受傷後の生活状況との関連—	高次脳機能研究	28	231-235,	2008
近藤啓太, 丸石正治	求心路遮断痛の診断と治療, 大脳皮質磁気刺激療法)	ペインクリニック	29 (別冊春号)	S206-214	2008
川原薫, 佐々木典子, 室田由佳, 本宮桂子, 富田昭, 丸石正治	高次脳機能障害者ケアユニットの紹介とその効果の検討.	作業療法ジャーナル	42	969-974	2008
種村純	社会的行動障害に対するリハビリテーションの体系とわが国の現状	高次脳機能研究	29巻1号		2009.03 予定

用稲丈人, 狩長弘親, 山本陽子, 八木真美, 種村純	脳損傷者の社会復帰状況と知能、注意、記憶、遂行機能検査との関係	高次脳機能研究	28 卷 4 号	416-425	2008. 12
種村純	【高次脳機能障害のリハビリテーション】 遂行機能障害のリハビリテーション	Brain Medical	20 卷 4 号	315-320	2008. 12
種村純	遂行機能の臨床	高次脳機能研究	28 卷 3 号	312-319	2008. 09
種村純	【生活場面からわかる高次脳機能障害 何に気づいて、どうすればいいの?】 病棟でどのようにかかわるか 遂行機能障害とリハビリテーション	リハビリナース	1 卷 3 号	244-250	2008. 05
宮崎彰子, 種村純	【生活場面からわかる高次脳機能障害 何に気づいて、どうすればいいの?】 病棟でどのようにかかわるか 記憶障害とリハビリテーション	リハビリナース	1 卷 3 号	236-243	2008. 05
平岡崇, 嘉村雄飛, 椿原彰夫	【生活場面からわかる高次脳機能障害 何に気づいて、どうすればいいの?】 退院に向けて、知っておいてほしい知識 高次脳機能障害支援普及事業	リハビリナース	1 卷 3 号	265-270	2008. 05
椿原彰夫	【医療技術と医療福祉学】 リハビリテーション医療における技術の進歩	川崎医療福祉学会誌	18 卷 Suppl. 1	7-14	2008. 06
種村純	【認知症のリハビリテーション】 認知症の診断と評価 神経心理学的検査	MEDICAL REHABILITATION	91 号	83-88	2008. 04